

| | |
|------------------|---|
| Title | 序：日本でクロムウェル生誕四百年を記念する |
| Author(s) | 大木, 英夫 |
| Citation | 聖学院大学総合研究所紀要, No.17, 2000.3 : 3-4 |
| URL | http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3483 |
| Rights | |



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

序 ——— 日本でクロムウエル生誕四百年を記念する

聖学院大学総合研究所長 大木英夫

日本でクロムウエル（一五九九〜一六五八）の生誕四百年を記念するシンポジウムが、一九九九年十月二十八日に東京芸術劇場で行なわれた。その記録が本号に収録されている。聖学院大学総合研究所がこの記念行事を行なったという事実は、やがて歴史の意味をもつものになると思う。クロムウエルは、いろいろな誤解されてきた。しかし、聖学院大学総合研究所におけるイギリス十七世紀研究は、クロムウエルの本質とその歴史的意義について、ひとつの見方をもってきた。クロムウエルがピューリタン革命のヒーローであることは、だれも否定しないであろう。その評価は、ピューリタニズムをどう理解するかと密接に結びつく。もしピューリタン革命が、近代社会の形成に深く関与するものであることを認めるならば、その意味文脈においては、クロムウエル像の認識は改まるのではないだろうか。ともかく、公開シンポジウムの形で、クロムウエルを記念したという事実は、日本で初めてのことであると思う。

イギリスの議会議事録に、クロムウエル像が立っている。このシンポジウムのコーディネーターとし

て述べたわたしの挨拶で、「世界史の深層動向」においてその像を理解するということ述べた。この言葉をあえて用いるのは、その背後において、ゲオルク・イエリネックの『少数者の権利』に出てくる次のような言葉を思い起こすからである。

近代社会は、常に前へ前へと進む民主化の過程にある。この発展を喜んで迎えようと、あるいはそれを恐れようと、この歴史の自然的過程を長期間にわたって妨げる力は、この世に存し得ない。あるところでは急速に、あるところではためらいながら、諸文明国は、普遍的水準に向かつて進んでいる。地層学者が、山や時の経過とともに崩れ、その高地は沈下して低地になるだろうと語ることは、社会にもあてはまる。

このイエリネックの言葉の含蓄を、わたしは「世界史の深層動向」と言い換えた。『近代世界の成立にたいするプロテスタンティズムの意義』を書いたトレルチも、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を書いたヴェーバーも、今から百年前ハイデルベルクでイエリネックの影響下にあった年若い同僚であった。日本においてイエリネックのこの見方をこの研究所で継承することがあり得る。その止めることのできない「民主化」という「世界史の深層動向」の文脈においてわれわれはクロムウェル像を振り返って見た。それがわれわれの記念の行事を促した。

本号は、いろいろな研究活動の記録や、研究論文（その中にはアメリカの若い学者からの寄稿論文も含まれている）で、まさに満載である。この研究所の活発な活動に、所長としてわたしは感謝していることを、ここにあえて記して、まえがきに代えさせて頂きたい。